

IV-86

意識調査による公園・緑地整備に関する研究

関西大学大学院 学生員 神谷 大介*¹ 関西大学工学部 正会員 吉川 和広*¹
 京都大学防災研究所 正会員 萩原 良巳*²

1. はじめに 都市化の進展や余暇時間の増大、自然環境に対する意識の高まり等により都市におけるゆとりや快適性を確保できる公園、緑地、水辺等の自然環境の整備に対する人々の要望が高まってきている。そこで大阪府の北東部に位置する吹田市、茨木市、高槻市、摂津市を対象としたアンケート調査を行い、住民の意識から対象地域内の公園・緑地、河川等の評価を行った。その結果、吹田市にある自然的空間の評価が高いものとなった¹⁾。本研究では、吹田市の評価が高かった原因を調べるとともに、住区内の小規模な自然的空間を取り上げ、利用者と未利用者による自然的空間に対する意識の違い、および自然的空間の整備による人々の行動の変化とその原因について分析することによって、今後の自然的空間整備の方向性を示すことを目的とする。なお、本研究で対象とした公園・緑地等は人間の手によって造られた自然のある空間であることから自然的空間と呼ぶこととする。

2. 吹田市と高槻市の比較 吹田市における調査を行う前に、人々が望ましいと思う公園について調べ、その結果をもとに表1の9個の特性を取り上げた。これらの特性を5段階評価し、その結果より主成分分析を行った(表2、図1)。なお、サンプル数は132である。

表1 自然的空間の特性

①広い	④できることが多い	⑦お年寄りや障害者が利用しやすい
②静か	⑤交通の利便性、位置的行きやすさ	⑧快適に散歩・散策ができる
③自然とふれあいやすい	⑥緑、水辺が充実している	⑨子供が遊びやすい、遊ばせやすい

表2 各特性の固有ベクトル

特性	第1主成分 (62.3%)	第2主成分 (20.7%)
①	0.376	0.206
②	0.275	0.463
③	0.317	0.018
④	0.267	0.350
⑤	0.330	-0.548
⑥	0.391	-0.229
⑦	0.433	-0.372
⑧	0.311	0.351
⑨	0.255	0.072

(かつこ内は寄与率)

表2より、第1主成分における固有ベクトルの値にそれほど違いがみられなかったため「バランスの良さ」と解釈し、第2主成分は負の側で「交通の利便性、位置的行きやすさ」が大きく効いていること等より「郊外型—都市型」と解釈した。同様に高槻市においても主成分分析を行った(図2)。この結果、第1主成分は同様に「バランスの良さ」となったが、ほとんどの自然的空間が主成分得点の絶対値で0.5以下と差異がみられなかった。このことより、吹田市の自然的空間は個々ではバランスがあまり良くないが全体としてバランスの良い整備であるといえる。これは個々の自然的空間が個性を有しており、かつ全体として多様性があると考えられる。そこで自然的空間の個性とはどのようなものなのかを調べる必要があり、また規模の小さな自然的空間は地震時の一時避難場所になるため人々に認知されており、普段から利用されている必要がある。そこで、吹田市と摂津市の境界に位置し、近年整備され、吹田市民の利用が過半数を占める市場池公園および市場池オアシス広場を対象としてアンケート調査を行った。

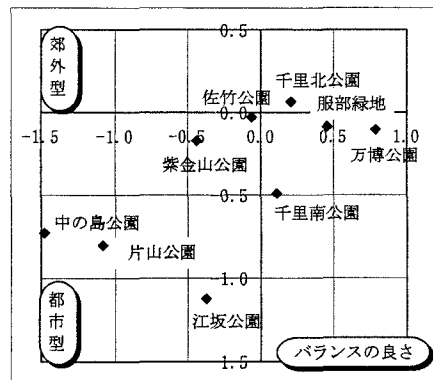


図1 吹田市主成分分析結果

キーワード：意識調査

*1 〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35 TEL(06)6368-1121 *2 〒611-0011 宇治市五ヶ庄 (0774)38-4307

3. 市場池公園における分析 市場池は大阪府のオアシス構想によって整備され公園化されたため池である。整備以前は1haの市場池公園に隣接して水面が0.9haのため池が存在していた。整備によって1.8haのため池公園となり、隣接する公園とあわせると2.8haのため池公園となった。

まず、利用者を対象とするアンケート調査を行った(サンプル数104)。整備前後の利用頻度の違いについて図3に示す。これより利用頻度は増加しており、整備により地域住民からみて公園の価値が上昇したと考えられる。ただし、この調査は利用者を対象として行ったため整備後利用しなくなった人は調査できていない。次に、ため池公園の評価因子を把握するために、ため池公園に対するイメージ34項目の5段階評価をもとに因子

分析を行った。その結果第1軸は「好ましい」が因子負荷量0.84と最も高かったため「好ましさ」とし、第2軸は「個性的」が0.81となり「個性」とした。「好ましさ」には身近に感じること、明るく開放的であること、手入れが行き届いていることが影

響している。ここでは「親しみやすい」、「近づきやすい」、「利用しやすい」の3要素をもって身近に感じるとしている。個性に関しては魚やため池、樹木、鳥等といった自然の要素が影響している。また、イメージ34項目の相関分析の結果、「親しみやすい」に対して「まちにあって(0.40)」、「手入れが行き届いている(0.35)」、「水辺に近く感じる(0.32)」が比較的高い値を示した。これより自然的空間の身近さとはまちと調和しており、清潔感のある空間であるといえる。また「自然を感じる」に対しては「季節感を感じる(0.54)」、「手入れが行き届いている(0.35)」となった。なお、利用者と未利用者による公園で行いたいことや望ましい公園に関してはあまり違いはみられなかった。これより、利用において自然的空間の状態より個人の属性や時間のゆとり等が影響していると考えられる。

4. おわりに 吹田市と高槻市を比較することにより、市としては個々の自然的空間が個性を持ち、全体としてバランスのとれた整備を行うことが重要であることを明らかにした。これは住民の嗜好の違いや属性、利用目的に応じて自然的空間を選択できるためであると考えられる。しかし本研究において明らかにはなっていない。また、整備によって利用頻度が増加した自然的空間の評価因子として好ましさと個性を抽出した。自然的空間の好ましさとはまちと調和しており清潔感があることであり、そこに季節感を感じることでできる樹木や水辺等を取り入れることによって、個性のある好ましい自然的空間が創出できると考えられる。また、これまでの調査を通して自然的空間の利用目的として散歩が最も多く、小規模な自然的空間はそこだけで散歩を楽しむのは難しいこと、まちと調和した自然的空間が好まれることから、そのまちの風土や土地利用等を考慮した自然的空間づくりが重要となってくる。そうすることによって個々の自然的空間は好まれ、個性をもち、そして地域全体としてみたときに多様性がうまれ、バランスの良い整備ができると考える。

最後に、調査・分析において御助言、御協力して頂いたパシフィックコンサルタンツ(株)平野久史氏、および御協力して頂いた京都市山口勝広氏に心より感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 山口勝広・吉川和広・萩原良巳・神谷大介：意識調査による地域の自然環境評価に関する研究、関西支部年次学術講演概要集、1999。（投稿中）
- 2) 神谷大介：密集市街地内ため池公園の環境資源価値評価に関する研究、関西大学卒業論文、1998。

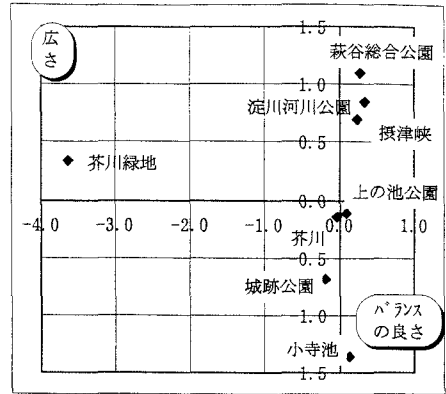


図2 高槻市主成分分析結果

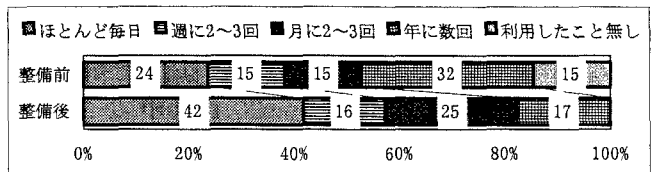


図3 整備前後の利用頻度の変化